

●7月23日(祝)開催：HNCM企画

住吉と有馬を結んだ古道

「住吉道(有馬道)と魚屋道の核心を歩く」に参加して

報告文/布引支部 吉野 宏

写真協力/旗振支部 勝田 徹

沖縄が梅雨明けと報道されたのが6月12日。例年なら近畿地方の梅雨明けは、その約1ヶ月後に発表されるのだが、私達の街・神戸の空は未だスッキリせず、発表されぬ。九州北部を集中して襲った豪雨は、かつて経験したことの無いほどの量を降らせ、河川決壊や土砂崩れなどによって甚大な被害をもたらした。熊本県など地震の復興も未だ完全ではない中、被害を受けた皆様の心中を思うと心が強く痛む。

一方コロナウイルスの感染者数は息を吹き返したが如く日毎増加し、**第二波は大津波**となって日本列島を襲うであろう**気配**である。人類が人類の為に永年に亘って培ってきた**生産活動**によって**大気**の汚染はどんどん進み、それによって**地球温暖化**は益々上昇。**温暖化による天候異変**は更に巨大化し、**取り返しのつかない大災害**が頻繁に発生するのでは?・・・そんな**地球規模の危機的環境**の中、加えて**コロナ**のようなウイルスは益々強力度を増し、**地球上を我が物顔で暴れまわる**のでは?・・・と、嫌な事ばかりを考える数ヶ月であった!!・・・



読図実習を兼ねてコースの確認をする

そんな悶々とした日々の中、再開した例会への参加は、なによりも一服の精神安定剤となる。

阪急御影駅の山側にある深田池公園8時30分集合。時間に遅れる参加者は無く、17名が集った。**検温し、マスクの確認、氏名・緊急連絡先を記帳頂き、最後に消毒ティッシュを渡す。**  
**コロナ対策の受付は万全**である。



雨天続きによる増水や登山道の崩落など、3日前の下見で確認した事項と**熱中症**などを考慮し、コースの短縮もある!ことなどを挨拶時に話し出発した。

白鶴美術館前を通り住吉川沿いを北上。住吉台から延びた登山道迄一気に歩き小休止。間をみて素早く資料の地形図を開き、読図のおさらい。この左手のピークは三角点(314.4M)のある荒神山になる。六甲最高峰(931.3M)から磁北線を南へ辿ってみると、保久良神社の西側、岡本7丁目となり、その東西を有馬方面へ抜けた2本の道(登山道)が、西側に**住吉道(有馬道)**、



本住吉神社東側にある有馬道の石標(ネット画像)

東側には深江の浜から有馬へ通じた**魚屋道(ととやみち)**である。この2本の道は、戦国から江戸時代にかけて「**抜け荷の道**」としての歴史がある道で、その歴史については又の機会に詳しく記載したい。

平坦な道を五助堰堤めざし歩き始める。ものの5~6分で左へ石切道、右へ黒五谷への分岐地点に着く。1パーティと2~3人のハイカーが休

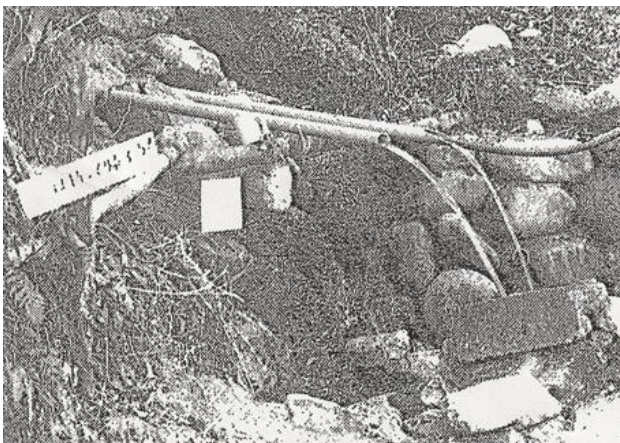
んでいたが、そのまま進み、五助堰堤の見える本道へ入り、堰堤をバックに写真に納まった。



五助堰堤をバックに参加したメンバー

五助堰堤は住吉川の右支流、五助谷の流れが住吉川に流れ込む位置に出来た堰堤で、堤の長さは78メートル、高さは30メートルと、東西30キロ、南北10キロに広がる六甲山系にある650基以上の砂防堰堤の中でも最大規模の堰堤とされている。1957年（昭和32年）の完成との表示から数えてみるとすでに63年の時を経た老堰堤である。

五助山への入口を左に見て小橋を渡り、少し進むと右手に水飲みの場所が有り、ベンチを設けているので小休止する。昭和60年代の夏場はトレーニングの後、この場所から先の右岸側にある大きな岩の傍で水浴びするのが常で、この水場（確か五助の湧水と言っていたように思う）で飲み水を調達したものだ。



五助の湧水と言っていた頃（昭和60年代）



住吉川の右岸と左岸について・・・説明

一息ついた後、徐に立つ。少し先に住吉川右岸側への分岐に出会う。今は通行止めの柵を設けているが、一昔前までは、右岸側の登山道を歩くのが主流であったが、年々荒廃が進み、現在は左岸側が歩きやすく一般登山道となっている。

今回のコース中、過日の大雨で増水による通行不可の箇所が無いかと、下見によって確認していたので安心して歩くことが出来た。

歩き始めて2時間半余り、本コースの核心部に取付く。普段はほとんど流れの無い枝沢を渡り、登りにかかる。

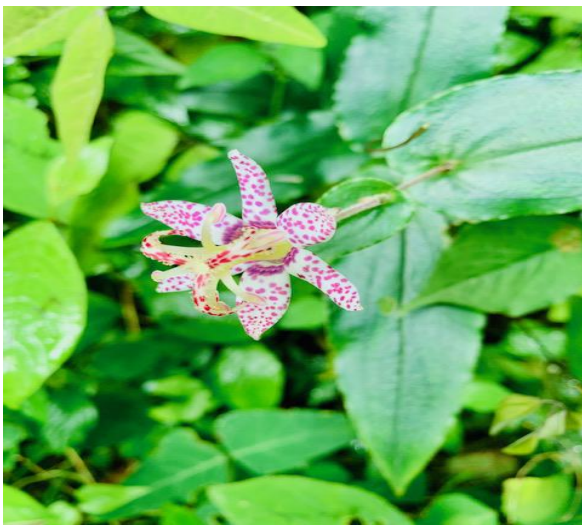


本日の渡渉？はここ1ヶ所のみでした！

登り詰めた風通しの良い場所で休憩を取る。水分補給、行動食などが女性のザックからどんどん出てくる。いつもながら、およばれするばかりで「有難う！頂きます！」の言葉しか無いのが心苦しい。（感謝、感謝です！！）

この辺りから住吉川を隔てて西おたふく山（878M）が迫ってくる。魚屋道との合流点もまもなくだ。・・

右手の草むらに目をやると、開いたばかりと思われるヤマジノホトトギスがお出迎えしてくれた。六甲山系の登山道ではよく見かけたように記憶しているが、この花に出会った時期はもう少し先（初秋）ではなかったかな～？などと考えながら歩いていると、この花の斑点が、ホトトギス（鳥）の胸の模様に似ていることからそんな名が付いたと教えてもらったことを思い出した。・・・



開いたばかりのヤマジノホトトギス

・・・魚屋道は、ロックガーデン中央稜を柱に、沢筋や枝道から来た登山道が合流し風吹岩の北側で一緒になる。～芦屋から六甲最高峰に登り有馬へ下って温泉を楽しむ！～というコースは近畿圏では定番の人気コースであるため大勢のハイカーが訪れる。・・・したがってコロナ対策の最も重要である「密集を避ける」為、土樋割峠（どびわりとうげ）へ廻らずに、この先から右手へショートカットし、雨ヶ峠を横切って東おたふく山へ行くことに変更した。



オカトラノオ

雨ヶ峠にある東屋では二人のハイカーが休んでいたが、会釈だけかわし東おたふく山への登りに入った。階段を数段登った右手方向に三角点があった。点名は「雨ヶ峠・4等三角点621.29M」。新しい試みとしてスタートしたヒヨコの単独例会「シリーズ・三角点を訪ねる」で計画予定をしているので確認しておいた。



雨ヶ峠の4等三角点

その場所からすぐの見通しの良い緩やかな場所待望の昼食タイムとした。

10名程の先客がおられたが、その素振りから、ススキ草原の再生と植物を中心とする草原の生物多様性の保全を目的に活動されている「東おたふく山草原保全・再生研究会」の方々だと思われるので会釈をし、食事に入る。



下界とは4～5℃違うと思われる温度は、さわやかな風に一層涼しく心地よく感じる。

北側に931.3Mの六甲最高峰。西に878Mの西おたふく山。南面は芦屋CCの南側に400M台

の保久良の背山である。697Mのここ東おたふく山は、丁度その中間で、風通しが最高に良い

のがよく理解できるだろう。



昼食後笑顔の面々！東おたふく山にて

下山は雨ヶ峠へ戻り、横池のスイレンを見学すべく甲南パノラマ道経由で女池側から入ったが、雄池のスイレンは時期が少し遅かったのか、花はほとんど無く、葉ばかりであった。



イノシシもびっくり！！超巨大なキノコ

代わりに直径 30 センチ以上もある様な傘をつけた超巨大なキノコを見つけ、写真に納めて

ファイナーレとなる・・・。

いや、ファイナーレはその後、思いもしなかつ小生のアクシデントであった！・・・がその話は又後日に！！

天 候 晴れ

参加者 17名（ヒヨコ会員 17名）

お願い

\*（ヒヨコニューサークルメンバーの企画には、コースや山のノウハウ等、アドバイザー役として小生（男）とK支部長（女）の2名が同行し

ている。メンバーはここ数年で随分と力をつけ、

ヒヨコの将来を立派に引き継いでくれると確信出来るようになった。そして本例会以降HNCM企画行事にはヒヨコ会員であればどなたでもご参加頂き、先輩会員の良きアドバイスを伝授願ひ、より絆を深めて頂きたく思います）